



Title	国語科指導における挿絵の活用考：指導書の変遷と「走れメロス」を視座として
Author(s)	大國, 眞希
Citation	太宰治スタディーズ 別冊. 2017, 3, p. 11-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/62141
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国語科指導における挿絵の活用考

——指導書の変遷と「走れメロス」を視座として——

大 國 眞 希

一、挿絵の活用と効用

藤原和好氏は「文学作品は現実の向こう側にある世界を描いています。そして、その世界は言葉だけでは届かない」として、「五感で読む」重要性を指摘し、「その一つの手段として挿し絵✓に注目したい」と書く。そして、「優れた絵が添えられていれば、文章だけを読むよりも、もっと奥深い世界に導いてくれ」る証左として、「モチモチの木」を解説している。

文字で書かれた文学教材から「リアリティー」や「生々しさ」を伝えるための「挿絵」の有効性を論じているわけだが、「モチモチの木」はもともと絵と文とが組み合わせられた作品から抜き出されて教科書に収められた教材であり、また、対象も小学生である。教材によつては独立した本文に教科書のために挿絵を施すこともあり、この場合は、もともと絵と文の組み合わせた作品とは厳密には異なる。

本稿では、中学生もしくは高校生を対象とした、教科書によつて挿絵が変化している作品を取り上げ、国語の指導において挿絵はどのように活用できるのかを考えてみたい。そのために一定期間、教科書に採用されて続けている、いわゆる定番教材で、中学生と高校生の教科書に掲載されていたことのある作品を祖上にのせてみよう。

「走れメロス」は現在では中学二年生用の教科書に多くみられるが、一九五七年から六三年あたりまでは高校生用の教材であった。【表】を参照されたい。高校においては、作品の現実感を補助するためにギリシャの神殿や風景、青年像の写真と共に、作者太宰治の肖像や筆跡などが掲載されていた。また、教科書に示された設問も、小説の「時」が現在、「所」が日本だったら、どのような変化があるかを問うもの（一九五七 秀英）や作者の執筆動機や人間観を問うもの（一九六〇 中央図書出版）であり、付された図版は、作品の読みともある程度の

関連を指摘することができる。

二. 指導書と挿絵

教科書に学習の手引きとして示される問いや指導書と挿絵とは、すべてがきれいな一致を見せるとまでは言えないまでも、ある程度の連動を指摘することは可能である。

以下は中学校教科書に目を転じて、例えば、学校図書を開いてみよう。一九六〇年、六九年では、基本的にメロスの心の移りかわりやメロスのことばについて考えさせる問いが設けられ、「竹馬の友」という語と主題の関わりについての問いはあっても、王やセリヌンティウスについての言及は見られなかった。

一九七二年には、メロスの行動と王の変化のつながりや「メロスとセリヌンティウスとは、どのような心で結ばれていたか」が問われ、その時の挿絵では刑場の場面において、メロスとセリヌンティウスが焦点化されている。

また、一九七八年（単元名は「小説」から「人間と行動」へと変更）になり、それまでメロスを中心に問われていた学習の手引が、メロスとめぐりあうことで王の心はどのように変化したかが問われるようになり、それを引き継いだ一九八一年（単元名は「心の触れ合い」）で、最初のメロスとの対面の場面の挿絵で、王が「指さし」をするなど、動きに表情が見られ、心情を類推させる描写がみられるようになっていた。

あるいは、一九九三年に太陽の動きと働きについての問いが

設定され、一九九七年の挿絵には太陽が描かれている。さらに全体的に赤みがかった挿絵が登場し、太陽（夕陽）と血を連動させて、作品を読むために挿絵を利用することが可能である。血と太陽の赤については指導書で指摘されることも多く（一九九〇 三省堂、二〇〇二 学校図書など）、二〇〇二年の教育出版の挿絵の色彩がギリシャの壺などの装飾を髣髴とさせるオレンジから、構図はまったく変わらないまま赤の色彩へと変更されており、赤を効果的に使用した挿絵となっている。但し、緋色のマントと響かせている挿絵は管見の限り、なかった。

特徴的な挿絵としては、二〇〇六年に音読を意識した教材観が強く示された時の挿絵を挙げることができよう。【図①】で示したように、マチスを髣髴

【図①】

髣とさせるような半抽（半分抽象）の挿絵が収められている。生々しいメロスの息遣いや身体性を考えるうえで一助となる挿絵と言える。

二〇一二年の学校図書の挿絵は、星と太陽を配した装飾的な挿絵で、太陽の動きと時間の推移を物語の展開とともに感じとれる。物



語の展開を日付とともに読むことを促すために効果的である。

三、挿絵と〈読み〉

挿絵を確認しながら、指導書を横におき、「走れメロス」の本文を繰っていくと、特に気になる場面がひとつある。それは、結末の緋色のマントを少女が捧げる、以下の部分だ。

ひとりの少女が、緋のマントをメロスにささげた。メロスは、まごついた。佳き友は、気をさかせて教えてやった。「メロス、君は、まっぱだかじゃないか。早くそのマントを着るがいい。このかわいい奥さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなくくやしいのだ。」
勇者は、ひどく赤面した。

そもそも、教科書に採用された当初はこの本文は削られていたこと（一九六二 開隆堂、一九六二 日本書院、一九五八 大修館、一九六二、一九六六 東京書籍）がある。その場合、本文はこの場面直前の「万歳。王様万歳。」で終了する。

更にならば、掲載されていたとしても一九九三年 三省堂「現代の国語2」の指導書には、「物語の末尾の、一人の少女が緋のマントをメロスにささげる場面をどう扱うかについての問題もある。ここは従来、作者太宰自身のかみ、照れである」とされてきたところであり、結末というよりは単なるつ

け足しな場面であると考え、本表では構成上の重要な扱いはしていない」とあり、重要視されていない。二〇〇二年 東京書籍の指導書に「『メロスの裸体』が象徴するのは『太宰自身の心』といってよいだろう。自分をさらけ出した心の中をのぞき見された羞恥の気持ちとともに、自分から考えても、がらにもなくちよつと格好よく書きすぎたかなというような照れをも『勇者はひどく赤面した。』という部分から読み取ることができよう。メロスはまさに太宰治自身となっており、作者太宰治の心が顔をのぞかせている部分であると考えられる。また、最後の『勇者は、ひどく赤面した。』の部分は、冒頭の『メロスは激怒した。』に呼応しているが、物語の内容を予感させる激しい始まりとは対照的に、大団円にふさわしい穏やかな終結となっている。」とある解説は、その意味で基準的な説明と言える。一九九七年 三省堂の指導書の語句説明には「一人の少女は群衆の代表であり、その喜びの代弁者として登場する。マントをささげるのはその象徴的行為である」「超人的な存在であったメロスが、きわめて人間的な存在に引き戻されている。理想を臆面もなくうたいあげた作者、太宰治のはにかみが示されているとする読みもある」とある。

だが、この結末の場面をどのように読むかは大きく解釈の別れるところであり、語句説明のところでは基準的な解説を提示する一方で、『理解教材の研究』に田中実の「お話（プロット）を支える力——太宰治『走れメロス』」が掲載され、そこ

ではこの部分について「少女の求愛を受け入れ、二人は神の加護の下、「わけのわからぬ大きな力」によって、結ばれることを示している」との読みが紹介されている。田中実氏は「メロスとは〈神々に愛された男〉であつた。そうすると、娘の捧げた「緋色のマント」とメロスの赤面がようやく解けてくる。これは一つのメルヘン、〈神々に愛された勇者〉にふさわしい花嫁が登場し、その祝福で物語が閉じられるのである」と書く。

一九七二年東京書籍では教科書内の発問で作品の結びの場面に書かれていることの意味が問われ、指導書ではこのように解説する。

緊張の連続であつた事件に終止符が打たれて、人々がわれに返つたときのはほえましい情景である。これまでの緊迫した表現に引き込まれて緊張した読者の心をメロスの狼狽ぶりで微笑させる。

この一節は、物語全体の進行が終わつたところで、思わず作者自身の心が顔をのぞかせている部分である。夢中になって、この物語を書いた作者自身の、がらにもなく、きまじめな物語を書き終つたことに對する、てれかくしのような含羞が顔をのぞかせている。

そして、「生徒の多くは必ずしもとらえきれないだろう。やむを得ない場合、教師から「自分の読み」として切り出すこと

はあつてもよいのである」とも書かれている。現在の学習指導要領では、創造的思考とそれを支える論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面から、言葉の働きをとらえ言葉に對する見方・考え方を働かせ、自分の思いや考えを形成し深める資質・能力を育成することが求められている。そして、学びの過程の質的な向上を重要視し、学習教育における質の高い学びを実現するために「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に取り組んでいくことの必要性を説かれている（平成二八年十二月中教審答申）。このような現状を鑑みると、挿絵は教師から「自分の読み」を提示されるのではなく、より対話的な指導を組み立てるための一助となるのではないか。

挿絵でマントをささげる少女が描かれているものは寡少であるが、一九九七年 光村

【図②】

に山本容子が手掛けた挿絵がある。【図②】をご覧いただきたい。ここでは、メロスとセリヌンティウスの背後からマントを広げる少女が描かれている。マントは翼のようにも見え、少女は天使の形象のようである。



挿絵がある種の読みを誘導することは免れ得ない。本作は人間不信の王とその不信を覆すために走るメロスが、いわば対比的に描かれている訳だが、それをどのような対比にとらえるのか、またその対比の様相をどのように読むのか、挿絵はある種の印象を読み手に与える。メロスが引き立てられて王と対面する場面は中学校の教科書のひとつの挿絵で採用されている場面だが、その姿は統一적ではない。メロスが捕縛され、跪いている挿絵もあれば、王の前に仁王立ちになっている挿絵もある。そもそも捕縛さえされていない挿絵もある。また、王にしても、玉座に座り、表情の見えない挿絵から皺の刻まれた顔が大きく描かれている挿絵までさまざまに存在する。

刑吏に引き立てられ、後ろ手に捕縛され、玉座の前に跪いているメロスと、捕縛されることなく王と対等に立つメロスの姿とは読み手に与える心象が大きく変わるであろう。指導書では、一九六〇年代からメロスと王との対立とが本作品の筋立てのひとつであることが指摘されていた。例えば、一九六七年教育出版の指導細案集には、「この小説は〈単純な男〉と〈複雑な王〉との対比、対決の物語だ」と指摘されている。ではどのような対比されているのか、ということだが、一九九三年には善玉悪玉的な読みを否定し、王の心理を主に刻まれた皺などから読み取るよう促している。王は「人間への深い不信感の念にとらわれている。したがって、メロスの信実も口先だけのうそだと考えた」。本作を読むねらいは、「主人公と対比される王

の考え方の変化を通して、小説の主題を具体的にとらえる」。

「人を信じられない王の心は、まずメロスたちの信実と真正面から対立する形で大写しにされる」。「しかし、この暴君の「孤独」がメロスたちの「悪い夢」に通じる作者太宰の虚構である点に注意したい」。「疑うことを知らぬ単純な善玉が分別に悩む悪玉の鼻をあかした、というだけでは王は動かされるはずもない」。「「わしの心」とも言うべき心の迷い、いわゆる「悪い夢」をメロスたちが全人格をかけて退けたところに、王の仲間に入れることのできる高い次元の信実が現れたのだと考えられる」というように。それに従い、メロスもまた善人でも超人でもなく、人間的な存在であることに注意するような説明が多くなる（例えば、二〇〇二年三省堂）。さらに、メロスが決して走り続けていることやそもそも冒頭で婚礼の買い物をするのは、後の場面で登場する妹の婿とのやりとりから推察すると早すぎるなど、作品内に見られる矛盾を指摘することで、メロスの「人間的」な側面が強調される。このことにより、王とメロスは共に「人間的」と読め、両者の対立は一旦曖昧化される。二〇〇六年学校図書 の指導書では「作者の描くディオニソスは、単なる粗暴さや横暴さの露出した王ではない。緻密さゆえに人の醜さを味わい孤独感を深めている。それをメロスと対照的に描いているが、精根尽き果てたメロスの内面にもディオニソス的なエゴイズムが表出されている。それを主題として読み取る見方も考えられる」と解説されたうえで、メロスを古

代メルヘンの勇者として読む若杉（藤平）俊明氏の「疾走する激情と肉体―「走れメロス」再論」が掲載されている。「王とメロスの「両者ともに他者に示すこと自体を意識しているのである。ここでは、「信実」対「不信」という世界観と世界観の対立は解体されて、いわば「賭け事」の材料になっている。こうして、ひ弱であるが知的な精神の権化である王と、強靱な肉体の激情を持つ勇者（及びその同志）との間で、賭に「勝つ」ことを自己目的化した、文字通り命がけのゲームが始まるのである。」「王は、メロスたちの「心」ならぬものの力に負けたのである。さらには、群衆も王の変化を無批判に受け入れて「万歳」という激情を叫びあげ、少女も緋のマントによってメロスの裸体を賛美する。激情と肉体の完璧な支配がここに完成したのである。」「王に象徴される、近代的知性的だが他者との齟齬をきたす精神の世界は、メロスを中心とした古代的なメルヘンの世界、すなわち激情と肉体だけで幸福を得る世界によって完全に崩壊したのである。」「近代人」とは言うまでもなく、「生理を精神で克服する存在」だろう。既に見たように、メロスは「一貫して激情とそれを支える肉体とに従っており、「生理」に敗れるべき「精神」などは激情以外には所有していなかった。その意味では、むしろ肉体に「敗れ」たのは王の方である。」「メロスは一貫して近代性と対峙する存在である。だからこそ、古代的なメルヘンの英雄として疾走できたのである」と。⁽³⁾

「古代的なメルヘンの英雄」「ゲーム」という読みに結び付

く挿絵があるので【図③】として示しておく。二〇〇二年三省堂の挿絵で、あたかもゼウス対ヘラクレスの対面のような王とメロスが示され、結末は杯のようなものがふたつ置かれているという、ゲームを髣髴とさせる挿絵となっている。

結末の刑場の部分の挿絵も一定ではない。メロスを実際は真っ裸ではなく、「象徴としての〈裸体〉である」と書く手引きもあり（一九六七年 教育出版など。ここでは「メロスは〈単純な自己絶対化の意識をも乗り越えている。メロスの〈裸体〉は、こうした王の

【図③】

心も打ったものの象徴であることを生徒に発見させる」とも書かれているが、メロスを全裸で描いている挿絵もあれば、腰布的な裸を描くもの、着衣を身に着



けているものもあるというように、ヴァリアントに富む。描かれているのも、抱き合うセリヌンティウスとメロス、（王はいない場合も、いる場合もあり。いる場合も中央に存在感を示すものもある）ば、端に小さくいる場合もある）。そのほか、セリヌンティウスの足にすがりつくメロス（セリヌンティウスは足だけの

場合もある)やセリヌンティウスのもとへかき分けるメロスなどを描く挿絵もある。

挿絵は間違いなく読みに影響を与える役割を担っており、その挿絵がどのように描かれているかによって読みは変わるとも想像される。同じ教材を読んでも、世代によって、教科書によって、同一とは言えない内容を読み取っているとさえ言いうるかもしれない。

四 挿絵を活用した授業

授業でどのように挿絵を活用できるであろうか。二〇〇二年の教育出版の挿絵を見てみよう【図④】。ここでは、最初に王の横顔とメロスの横顔が、ほぼ同じ大きさで示されている。メ

ロスはギリシャの壺の表象に連なる

黒で塗られている。王は白く、皺を

髻髻とさせる線に覆われており、皺

だけではなく、石化した彫刻がひび

割れているかのようだ。そして、三

枚目に当たる夕陽のなかを走るメロ

スを描いた挿絵では、メロスは太陽



【図④】

ミも疾走するメロスの横に散っている。

古代の伝説、詩から再生

された小説の人物たちは、

石化していた存在から、ひ

び割れ、新たな生命を得る。

メロスは典拠となった古代

伝説や詩の枠組みを越え、

メタ次元からの視点を得る、という読みを展開するために、こ

れらの挿絵は多いに役立つかであろう。

挿絵もまた、解釈を要請する。そのリテラシーを、本文の読みを深めるために活用することで、主体的で能動的な、深い学びを構築し、学習者の創造的な思考力を高められる授業展開を助けるのではないだろうか。

【図④-2】



注(1)「言葉では届かない世界——挿し絵を読む——」(『日本

文学』六六号、二〇一七・二)

(2)『都留文科大要紀要38』(一九九三) ↓『小説の力——新

しい作品論のために』(一九九六・二、大修館書店) 所収。

(3) 初出は「Groupe Bricolage 紀要」(一九九六・十二)

【表 1】
走れメロス (高校)

会社	タイトル	年度	教科書					画家	写真
			單元名	彩色	扉	場面	対面、刑場、太陽		
教育図書株式会社	国語現代文一 改訂版 国語 現代文一	1963 1967	心の姿			挿絵なし		指導書	0 ○
三省堂	高等学校新国 語総合一	1958	人間性	白黒 (墨 絵風)	ギリシヤ神 殿の柱、一 部	①川に飛び込むメロス、川 や岸辺。②走るメロス、小 さめ全身。木立。	①対面なし②刑場 なし③太陽なし	『高等学校 新国語 総 合：教授 用』	0 ○
秀英出版	国語二	1957	短編小説			挿絵なし	なし	短文の効果、なぜ三日の自由？段落小見出し。主 要人物の性格、小説「時」現在、「所」日本だっ たら？効果の変化	0 ○
秀英出版	近代の小説	1957	白黒			細長。走るメロス、後ろに 黒い木々。右手下に太陽。 白点描。	①対面なし②刑場 なし③太陽(走る 場面、木立の間 に)あり	小説は何を書こうとしている？メロスの人物像。 王の孤独、書き出しと結末。短文の効果。	0 ※ 1
秀英出版	国語新編一	1960	白黒		「顔えるヘ ルメス」像 の写真 「青年像 (ギリ シヤ)」写 真	①「神殿遺跡のある丘 (シ シリー島)」写真 ②「太宰治文学館の御坂峠 (山梨県)」写真	なし	メロスの気持ちと行動	0 ○
筑摩書房	国語一	1959						『高等学校 国語 総 合：指導の研 究』	0 ○
中央図書 出版	高等学校国語 総合一 (改訂 版)	1960	近代の小 説		「御坂峠よ 富士を望 む 右下方 に太宰治 碑」の写真	①「シラクーザ (シラク ス) 市郊外の遺跡、はるか にシラクーザをのぞむ」写 真②「太宰治筆跡」の写 真、「筆塚と廣野」③「シ シリー島の地図」④「昭和15年 春三厘にて 太宰治」写真	なし	何について書くようど？作者の構想と段落。 作者の苦心、メロスの心の動き。作者の執筆動機、人 間観、人生への希望。	0 ※ 2
東京書籍	新編 国語総 合編一	1959	小説			挿絵なし	メロスの人物、王の心理の変化。	『新編国語 学習指導の 研究』	0 ※ 3
明治書院	改訂 高等国 語総合二	1960	人間性			①「裸足のカラテミア人 (ローマ・カピトール美術 館)」写真②「太宰治」写 真	左横、メロスの心理の動きと人間性、王の心理の 変化		0 ※ 4
明治書院	現代国語一	1963	小説 (一)		「エーゲ海 にあるバト スス島」写 真	1960明治 (同上)	なし	メロス、セリの心理の動きー人間性	0 ※ 5

(注) 画家欄：D…画家の名前の記載がない／写真欄：※1…作者写真は巻頭の口絵、※2～5…作者写真は本文内